

平成30年度 第2回
寒河江市総合教育会議
会 議 録

平成30年12月21日 開会

平成30年12月21日（金曜日） 平成30年度 第2回寒河江市総合教育会議

○ 会議出席者

寒河江市長	佐藤洋樹		
寒河江市教育長	軽部賢		
寒河江市教育委員	鈴木淳一	國井晴彦	
	高橋まり子	鈴木多鶴子	

○ 事務局職員の職氏名

総務課長	竹田浩	総務課課長補佐	佐藤倫久
学校教育課長	佐藤和好	指導推進室長	山口義博
生涯学習課長	高林雅彦	スポーツ振興室長	鈴木隆
学校教育課課長補佐	白田純一	生涯学習課課長補佐	小野善英

○ 日程

平成30年度 第2回総合教育会議日程
平成30年12月21日（金曜日）

午後3時00分 開議
市役所1階 議会会議室

1 開会

2 あいさつ

3 協議

(1) これからの寒河江市の学校のあり方について

4 その他

5 閉会

1 開 会 午後3時00分

2 あいさつ (佐藤洋樹市長)

3. 協 議 座長：佐藤洋樹市長

○佐藤洋樹市長

それでは協議になりますが、これからの寒河江市の学校のあり方について、というテーマであります。まず手元の資料について、これまでの検討経過やこれからの検討の方針や考え方を踏まえて、またスケジュールなども合わせて、説明をいただきたいのでよろしくをお願いします。

○佐藤和好学校教育課長

私の方から資料の説明をさせていただきます。寒河江市立学校の今後のあり方に関する懇談会を昨年の9月から今年の11月まで4回開催し、多くの意見をいただいております。今回の資料につきましては話し合われた意見をまとめたものになります。懇談会に参加したのは有識者として元山大大学院教授の真木吉雄先生、学校からは寒河江中部小学校、幸生小学校、陵東中学校の各校長先生、PTAより三泉小学校、陵東中学校、陵西中学校のPTA会長、計7名の方々から多くの意見をいただいております。

第1回目の懇談会につきましては各学校の現状、学校関係、PTA活動関係について意見をいただいております。資料の意見交換の概要の1ページから3ページに第1回目の概要についてまとめております。地域のために学校があるという考えでよいのか。教育の効率化を考えた時、ある程度の規模でやっていくべきか非常に大きな課題である。学校が地域のコミュニティという考えがあったが、保護者の中にはより良い施設の整った新しい学校を望んでいる。中学校で部活が大きな問題で、小規模になると部活が組めなくなるのでは。子どもにとって大きなマイナス。小さいなりに先生が目が行き届く教育は子ども達にとって良い。コミュニティスクールは学校に地域が関わって中身を豊かにしていこうという流れになりつつある。などの意見をいただいております。

第2回目につきましては、本市中学校の適正配置、適正規模のあり方について意見をいただいております。内容につきましては4ページから7ページにまとめております。ある程度の人数の仲間がいて、その中で競い合ったりできる規模が望ましい。大事なのは子ども達がすくすく育ち、地域のことを思っていけるような環境で育てられること。現状学区のままで各中学校を建てるのが一番良いが将来の生徒数減少が分かっている同じ場所に新しく建てるということでのよいのか。などの意見をいただきました。

第3回目につきましても今後の小中学校の適正配置、適正規模のあり方について意見をいただいております。内容につきましては8ページから13ページにまとめております。どの程度の規模に構想を考えていくのか。検討委員会を立ち上げ、検討を行い、地元

からの意見も聞きながら計画を立てていく必要がある。地域と学校はどう関係性を持つていくのか。学校がなくなると地域はすたれるのか。中学校では子ども達は自立しなければならないが、そうなる様々な行事の中で競いながらやれるので小規模の1クラスよりは3クラスのほうが望ましい。陵東中学校ぐらいの規模が一番良いのではないかと思う。文科省では12から18学級が適正規模といっている。クラス替えができるぐらいが良い。などの意見をいただいております。

第4回目は想定される学校づくりについてと検討委員会の設置についての意見をいただきました。内容につきましては14ページから20ページにまとめております。学校の統合という考え方が後ろ向きになりがちだが、学校施設、生涯学習施設、体育施設を総合的に考えるなど夢のあることも多い。生徒数も減り、教員数のバランスも保てなくなる中で、新しい学校が時代に合った学校となれば、地元意識にこだわらず地域の理解も得られるのではないかと。今後、陵西学区の人数がかなり減ってしまうという話をすると、陵東中と一緒にになるとか、陵西小学校などという話になってくる。人数が減るイコール統合という考えが自然と受け止められていると感じられる。寒河江の学校をどうしていくかという議論をして合意形成を図っていかなければならない。その一つとしてコミュニティスクールなど、一つの手段としてあるのではないかと。などの様な意見をいただいております。検討委員会の設置についてですが、構成メンバーにつきましては具体的な名前を出すのではなく、こういう方が選ばれるということを決めてから、年度が明けてからそれぞれの組織が固まった段階でそこから選んでいただくということがいいのではないかと。2月ごろになると来年度の組織が具体的に見えてくるので市校長会や市PTA連合会に相談して固めていく。検討委員会は新年度から行う。などの意見をいただいております。検討委員会設置についての考えは、2019年5月に第1回目の検討委員会を開催し、2021年12月に答申をいただき、2022年3月に教育委員会で学校設置基本方針を作成し、2027年4月には新しい学校を建てるということになれば、その時までには開校を目指すという流れがいいのではないかとという意見をいただいております。また、検討委員会の検討と合わせて、地域での説明会を行う。教育委員会は学校設置基本方針策定に向けた検討を同時に進める。社会体育施設等の整備も合わせて検討する必要があるのではないかなどの意見もいただいております。資料についてはこのような形で懇談会の内容をまとめさせていただきました。

○佐藤洋樹市長

検討委員会を立ち上げていくというのは、懇談会の中で明記されているのですか。

○軽部 賢教育長

懇談会では現状と課題、今後どうしていくか等について話をしている、今度はそれを検討の段階へ進めていくべきだろうと考えています。検討会では地域の方、あるいは保護者

も小中学校だけでなく、もっと下の年代の保護者も含める等して、具体的にタイムスケジュールを決めて、ゴールを定めながら検討していく必要があるだろうと思います。検討会は懇談会より一歩進めていかなければいけないと考えています。

○佐藤洋樹市長

懇談会は会としての意見を求めているのではなく、それぞれの考え述べる会ということで、結論ありきではないということなのですね。

○軽部 賢教育長

懇談会はそういうことですが、検討会はある程度時間をかけて進めていきたいと思います。

○佐藤洋樹市長

検討委員会では、結論ありきではなく、方向性を決めるわけですね。

○軽部 賢教育長

懇談会の中では10年先ということになっていますが、米沢市では基本計画を策定して、20年後に中学校8校を3校にする等という計画になっています。本市としては、懇談会で提案させていただいた中では10年後としています。懇談会の委員の中には、あと10年もこの校舎でやっていくのか、という委員もいらっしゃいました。すばらしい環境の中で学習すれば、それだけ効果が上がるのではないかという考えからかと思います。建物の耐用年数は4,50年となっておりますが、学校の中にはある程度そのような時期に来ているところもあります。一方では建物の長寿命化ということもありますが、そういった様々なことを検討しながら、10年後にどういう姿をしていくかということを経年ぐらいかけて話していこうというのが今後のスケジュールだと考えております。このことを含めて議論をしていただければと思います。

○佐藤洋樹市長

10年あるいは20年ぐらいのスパンで考えていくということの中で、目の前の課題なども出つつあるということなので、長期的な展望を踏まえた上での現実の対応も必要な場合も出てくることもあるかと思います。

○軽部 賢教育長

大きなスタンスとしてはこうだけれども、その中で急激に学級が減ったなどという事態になれば、すぐに対応しなければいけないことなども出てくると思うのですが、大きなランドデザインとしてはこういう方向だろうと示しつつ、ただ途中で様々な状況が出

た時にはそこは対応していくというのは一つの考え方として盛り込んでいくことも必要かなと思っています。学級の減っていく学校もありますので、その課題については10年先という話ではないと思います。そういうことに関してはすぐに対応していかなければいけないと思いますが、市全体としてのグランドデザインをどうして行くかというのを3年ぐらいかけて議論して10年先こういう姿にしていこうというのをやっていきましようというのが考え方です。

○鈴木淳一委員

今、教育長がお話しされたことと同じような内容になってしまいますが、全国的な少子化が広がる中、寒河江市においても、市内小中学校の児童生徒数の減少が進んでいます。学級数の減少に伴う教職員の減少など、教育や学校運営上、様々な問題が指摘されています。前回の総合教育会議で示された資料に出ている10年後の児童生徒数について、この資料のように推移するとすれば、寒河江市の全体の生徒児童数が現在のおよそ3,300人から5年後には3,000人に、10年後にはおよそ2,800人へと減少の傾向が見られます。中学校の生徒数は現在の1,130人から10年後972人と、1,000人を切る予測が出ています。学校別では、10年後の陵南中は600人からおよそ530人、陵東中は383人から10年後は340人になるようです。陵西中は141人から10年後、83人になるようです。小学校は陵西学区の4校と南部、柴橋、三泉小の減少は大きいようです。一方、寒河江中部小は600人を超えることになっておりますが、ここを除いては減少傾向が予想されます。

先ほど施設の問題についてもありましたが、現在の学校施設の築年数は、陵東中は48年、陵南中は45年、陵西中は42年となっています。小学校につきましては、西根小が39年、寒河江中部小が38年、寒河江小は30年で、一番新しいのが、醍醐小で14年となっています。

このように、児童生徒数の減少と施設の課題から考えられることは、中学校の再編など中学校をどのようにしていくのか、小中一貫校をめざすべきか、小学校が統合に向かうのか、コミュニティースクールという手法を取り込むのか、建築年数も限界値を迎えるのであれば、新たな学校建設をし、勉強に特化することを目指した校舎を作り、そこに寒河江らしい教育を目指した学校づくりを考えていくのか等、寒河江市として特長ある教育を探し、生み出していくことも大切です。

この他に、不登校の問題、生徒数減少に伴う部活動の問題、教職員の働き方改革と、教員の定員問題、教員の病気による欠員対策、学校と地域との係わりなどの課題も考えられます。そしてなにより特別支援を要する児童生徒への支援対策も課題ではないでしょうか。

様々な問題がございますが、どれも欠かさず解決にもっていかねばなりません。ただ学校を変える、造るだけではなく、内面的な事柄を重要視し、10年後を目指したグラ

ンドデザインを描いていくべきだと、私は思います。

○佐藤洋樹市長

やはり建物がネックになるのでしょうか。新しい建物を建てるとなると大変だとなるのでしょうか。プレハブみたいなのではダメなんではないでしょうか。

○軽部 賢教育長

かつて学級数が増えて、さんさんプラン等もあり、プレハブで対応したこともありました。いかななものかとなったこともありました。米沢市などは既存の学校を使いながら、必要であれば校舎を造っていくというスタンスで、将来的には中学校が8校から3校になっていく計画で、老朽化したところから統合していくということのようです。基本は学校を減らしていくので、従来の校舎を使っていくことになりませんが、学区が広がってそういうわけにはいかなかったときは新しい校舎を建てるような対応をするようです。また、米沢は寒河江のように、この小学校はこの中学校へ、とそのまま学区が移行するのではなく、小学校区と中学校区が入り組んでいるところもあり、その小学校区を整理し、すっきりさせて中学校区に統一感を持たせるという意図もあるようです。そのような内容が米沢市の向こう20年のグランドデザインである基本計画の中には記載されていたようです。また、先ほど鈴木淳一委員からもありましたが、不登校や学力、部活など様々な課題があるという中で、現在、本市では小中連携ということで3年計画のうちの今年が2年目ということで中学校区ごとにやっております。学力については小中連携により、ある程度効果が上がってきているとは思っていますが、不登校は減らない状況にありますし、特別な支援を要する子どもの割合も高いという状況もあります。小中連携の事業の3年目が終わった後に、中学校区ごとにコミュニティスクールという形で地域も巻き込んでいろいろ議論をしていくことで、学力以外の課題、例えば、特別支援教育に対しては、子どもは理解が進んでいるが大人は進んでいない等、そのようなことについて地域も学校も一緒に議論することで課題解決にも繋がっていくのかなと思っております。学校のあり方を考えていく話し合いをコミュニティスクールの中でも行うことで、地域の課題なども少しずつ解決につながっていくのではないかと考えるところです。第4回目の懇談会の中ではそういうコミュニティスクールのお話をさせていただいていますが、それは前回の総合教育会議の中でもコミュニティスクールはどうなんだという話があったので、それを踏まえて4回目の懇談会の中では小中連携でやっているのをそれを延長して、今度はコミュニティスクールという形もあるのではないかとということをお話をさせていただきました。そこについては委員の方も理解を示していただいたのかなと思っております。

○国井晴彦委員

前回の総合教育会議の時に、ストレートに陵西学区の子ども達の数が減っていくのが一番問題で、そこになるべく早く手をかけていかないといけないのではないかと話をしました。その中で今日、こういう学校のあり方に関する懇談会の資料を見たのですが、陵西学区のように子どもの数が減っている学区の意見を見てみると、意外と学校が統合されたりして学校がなくなり自分たちの地域が廃れる、とかということよりも子ども達にもう少し多くの子供達と触れ合わせて、そのことによって子ども達をいい方向に導いてあげたい等という意見が多いなと感じました。鈴木委員からもありましたように人口減少のスピードも進んでいますし、我々が毎年学校訪問へ行くと児童数が少ない学校は先生と触れ合いが多くあって、授業も丁寧に教えてもらえて学力も高くなるのではないかと思います。またその後、中部小学校のような人数の多い学校に行くとまた新鮮で、児童数は多いので、子どもたち同士で学び合うというか、先生の教えが行き届かない部分はグループとか団体の力で学ぶことも覚えるのだなと感じて、児童数が多いのもそういう点ではいいところもあるな思ったところです。今後、外国人労働者なども入ってきたりするので、子ども達はそういう状況にも付き合っていかななくてははいけない。そうすると、いろんな人との触れ合いということも学んでいかなければならない。それとコミュニケーションの能力も高めなければならぬ。積極性もつけていかなければいけない。現状を考えると、なるべく早めに陵西学区等、具体的な対応を考えなくてははいけないのではないかなと思います。

○高橋まり子委員

先ほど校舎の話がありましたが、いずれ耐用年数が来ると建て替えなければいけないという現実的な問題があるという話でしたが、それに統合の話も含めて陵東中学校についての話がありましたが、結局は陵南中学校もあまり変わらない築年数であることを考えると校舎の問題に関しては2校とも建て替えなどと言う話も出てくるのかもしれないし、決して1校だけの問題ではないと思いました。これについては非常に予算のかかることでしょうかから、長い目で見てしっかり考えなければいけないことだと思いました。それは統合という問題だけでなく、陵南中の校舎もどうするかということも同時に考えなければいけないことだろうと思います。それと現在、不登校の子ども達、発達障害を持っている子ども達が全国的に年々増えていて、不登校の問題はいろいろなところで目に見えますし、普通の学校に通えなくなった子ども達が無理に学校へ行く必要があるのかとか、民間でやっているフリースクールに通っているとか、いろいろな問題を聞きます。そういう問題に対して寒河江市で何かできることはないかとずっと考えていて、こうだという成果はなかなか出てきませんが、調べている中で一つ素敵だなという取組があったので、持ってきました。大阪市の大空小学校という公立小学校があって、その学校の一年間を追ったドキュメンタリー映画で、『みんなの学校』というタイトルで全国的に上映されていますが、ご存知でしょうか。今度、天童で1月19日に上映されるので見てみたいと思っ

ているのですが、そこは公立小学校でありながら発達障がい、知的障がいの子どもも含めて普通学級と一緒に教育なさっているということです。前回にも話のありましたコミュニティスクール、地域の方たちを大いに巻き込んで、学校のサポーター的な人を大いに巻き込んでやっていくコミュニティスクールは大空小学校で取り組んでいることそのものの形なのかなと思い、この学校の経営方針に興味があるところです。先ほど市長さんからもお話ありましたが、統合となってくると10年とか20年とか長い目で見なければいけないという中で不登校や特別支援の子ども達というのは待ってられないという問題もありますので、コミュニティスクールという一歩進めたところで、それを今ある段階から早急にも取り組んでほしいなと個人的には思っているところです。

○鈴木多鶴子委員

まとめていただいた今後の学校のあり方に関する懇談会の資料を見せていただきますと、メンバーの方が学校やPTAの方ではありますが、統合に向けての意見が多いのかなと見せていただきました。その中で統合するにあたっては寒河江市ではどういう子どもを育てるのか、どういう学校にしていくのかというのが大事なのかなと思ったところです。こういう子ども達を目指すために、こういう中学校を統合していくとか、もしくは中学校ばかりではなく小学校も統合していくとなってくる場合もあると思いますが、どういう理念、というか、そういったものを打ち出しながら、寒河江ではどういう学校にしていくのか、というのが一つ。また、それから統合していくにあたっては、地域での学校との関わりが少なくならないように、やはりコミュニティスクール等を取り入れながら、地域の学校、子ども達にとっては地域の愛着を育むためにも、コミュニティスクールというような観点で大事にしていかなければいけないと思ったところです。あとは今もいろいろ出てきましたが、今の寒河江市の現状を見ても不登校の子どもが非常に多くなっています。個別の対応をすれば何とか集団になじむ子もいれば、個別の対応ばかりでない家庭を含めた対応をしていかなければいけないところもありますし、親子の連鎖とかいろいろな小さいころからの関わり方によって変わってくる環境のこともあったり、一概に不登校といってもいろいろなパターンがあると思うのでなかなか難しいとは思いますが、個別対応ができるようなことも考えていく必要があるのかなと思います。例えば、統合して学校数を減らした場合、先生も減らすのではなく、そういった対応できる先生を確保しながら個別対応、特別支援、発達障がいのお子さんもなのですが集団ではなじまないけれども、個別だと能力の伸びるお子さんもいますし、時には集団での経験も必要で、いろいろなことを考えると今の現状では先生方もいっぱいいるところもあるので、学校を減らした場合は個別対応の先生方も確保しながらきめ細かな対応をしていくことに結び付けていければいいなと思っているところです。

○佐藤洋樹市長

検討委員会は来年の4月に委員を選任するようですが、懇談会においてはどちらかというところ統合や少子化に対応して学校のあり方を見直していくことに理解のある方が非常に多いようですね。

○軽部 賢教育長

検討委員会では委員の方が町会長さんとかもう少し委員選出の幅広がってくると、地域コミュニティの中核だということで学校を残すべきだと言う方も当然出てきますし、会議だけでなく、地域との話し合いをして、その話し合いの様子なども踏まえて検討していくということが必要だと思います。あるいはアンケートという形もあるかもしれませんが、幅広い意見を踏まえてその中で検討していく。時間もかかるし、合意形成しながら、納得感の持てるようなものを時間をかけて作っていったらと思っています。その中で必ず課題解決のためにはどういった学校のあり方があるのかというのが大事になってくると思います。

○佐藤洋樹市長

どうしても議論が統合の方向に集約されてしまう傾向になってしまうようです。陵西学区の方をどうするかという議論が中心になってしまっていて、全体の課題の議論というのが手薄になって議論が深まらない可能性があると思います。それで話が前に進んでいかなくなることにもなってしまうのかなと思います。

○軽部 賢教育長

検討委員会だけですべての課題解決とはいかないと思うので、先ほど高橋委員からもあったような特別支援教育に対する認識を広めていくなどというのも同時進行でやっていく必要があるのかなと思います。あり方検討委員会というのは学校の適正規模、適正配置などというところを焦点化して話をしていく、不登校や特別支援教育、学力向上などといった課題については当然大事にしながら同時に話しあっていくべきことだと思いますが、10年先の姿もある程度議論していかないといけないのかなと思います。

○佐藤洋樹市長

特別支援を要する子どもの割合が、寒河江市では高いのではないかとされているようですが、データはそうかもしれませんが、実態としてはどうなのでしょう。割合の高い特別な理由などがあるのでしょうか。

○軽部 賢教育長

理由というところまでは調査しているわけではありませんのでわかりませんが、例えばADHD等の診断をもらっている子ども、あるいは診断をもらっていないのだけでも

学校で特別な支援が必要で特別支援の会議で話題になっている子どもなども集計するとこの前の校長会で出た数字になるのではないのでしょうか。平成30年度の調べで寒河江市は8.9%となっています。国全体では平成24年度の調査しかありませんが、6.5%となっています。

○高橋まり子委員

いじめの認知度が上がっているのと同じように発達障がい認知度というか注目度というか、寒河江市は上がっているの数字が上がっているような気がしますけどどうなのでしょう。

○軽部 賢教育長

いじめの認知度は注意深く見ているので数字は高くなっていますが、発達障がい等々については客観的に診断を受けている子どもさんもいるので手をかけているから数字が高くなっていることとリンクしているとは思いません。

○高橋まり子委員

千葉の知り合いの方からは10年前と比べても3倍から5倍の勢いで増えているなどという話を聞きました。

○軽部 賢教育長

様々な関係機関、医療機関にかかって診てもらうのは格段に進んでいるでしょう。そうすると診断をもらう子どもさんも当然増えてくる。以前は心配な状況であってもなかなか医療機関などに診てもらうことも少なかったのですが、今は早く診断を受ければそれに応じた対応を受けられるとすれば、そういう意味では関心は高いと言えると思います。高橋委員からお話のあった映画も私は3年前に2回程見ましたが、素晴らしい映画だったので、その後陵南中学校でも見ましたし、市教育研究所の特別支援部会の先生方にも見ていただいて、一般の保護者の方とか市民の方々にも見ていただくと、そういった子どもさんへの対応の仕方がどうあるべきかというのがもう少し理解が進むのではないのでしょうか。ノーマライゼーションの時代になってきてはいますが、年齢の高い人ほど理解が進まないような気がします。

○高橋まり子委員

学力向上も大事だと思いますが、この多様化の時代に入っていて、そういったあり方の人も認めていくような目を養うことは非常に大事なのではないかなと思います。

○鈴木多鶴子委員

今話のあった発達障がいの子と不登校の子が非常に多くて、特に不登校の子では全欠の子もいるということで何らかの動きを出していかないと状況は変わっていかないのかなと思います。逆にそういう子がどんどん増えいく可能性は社会も変化していく中で大きくなっていくのではないかと心配なところであります。寒河江市ではそれをどんな形で対応していくのか、施策を打ち出すのか、例えばフリースクール的なものを作るのか作らないのか等、そのようなことも含めてもう少し具体的に考えていかなければいけないところにあるのではないかなと思っていますところでは。

○佐藤洋樹市長

子どもの貧困が話題になっていて、山形県も貧困率などが相当高いと聞いていますが、寒河江ではどういった状況なのかというのは何らかの形で把握しているのですか。

○軽部 賢教育長

この前、県で調べた16%という、子どもの貧困率という定義に当てはめて出た数字があるようですが、寒河江市としてはそういった数字は持っていないと思います。学校においては、就学援助の率については各学校で調べてみると10%ぐらいになっています。1割ちょっとぐらいの方は就学援助をもらっている。それは貧困率といえるかどうかですが、援助をいただいている1割ぐらいの方は経済的に苦しい生活をしていると言えるのではないのでしょうか。そういうことも教育とはリンクするでしょうし、学力もそうですし、学習習慣についてもそこまで手が回らないんだというので学校に来れなくなってしまいうというものもあると思います。やはり、いろいろリンクしているので総合的に考えていく必要があるのだと思います。学校に来れないというのは学校だけの責任ではなく、文科省の調査でも不登校の要因は複合的なものとなっています。いじめ以外の、人間関係とか家庭での放置、学習不足とか様々あるので、いろんなことを解決していくには総合的に考えていかなくてはいけないだろうと思います。学校でも、毎日のように家庭訪問して、親も困っているのと一緒にどう育てていくかという話をして、今まで全然親と話をしなかったけれども、少し親と話すようになった等改善されている例もあります。ではそうなると、すぐに学校に来るようになるのかというとそうでもなく、医療機関にかかり、3年間は様子を見たほうがいいのかと言われている例もあります。そうすると中学校には来れないけれど、次の高校には行ける子どもも出てくるわけです。一人一人ケースバイケースなので丁寧に多面的に見ることは大事なことで、何か一つ特効薬のようなものがあればよいのですが、非常に難しいところです。

○鈴木多鶴子委員

そういうことを踏まえて福祉の方でもいろんな手を打ちながらやってきています。学校でも本当にきめ細かにやっているのですが、数としてもものすごく増えているのです。担

任の先生でも、1クラスに何人もいると、何人も関わって家庭訪問したりしなければいけない現状で、学校だけががんばって対応していくというような状況ではなくなっているようなところであり、それがやはり地域のサポートとか、また、フリースクールがあった場合にフリースクールに通うことによってこの人達と話をしながら親も子どもも変わっていく場合もあるので、学校や家庭だけがという時代ではなく、いろんな機関と関わりながら親も子どもも何か気づいていく場所の提供というのが本当に必要ではないかなと思っています。

○佐藤洋樹市長

学校の先生と民生児童委員とかケースワーカーとか福祉行政関係の方と情報交換や相談などはしていると思いますがどうなのでしょう。

○軽部 賢教育長

中学校では2ヶ月に1回ぐらいは主任児童委員と話し合いをしているし、課題のある子どもに関しても話をしており、情報を共有してはいますが、一気に解決するには難しい問題がたくさんあるのではないかと思います。そういう意味で先ほどのコミュニティスクールのような、学校のあり方をどうしていくのかという話の中で、地域も巻き込んでやっていくことで、課題解決にもつながっていくのではないかなと思っています。不登校も中学校になると増えますが、それは思春期にかかって増えてくるもので、ファクターというのは小学校の時から持っていて、それが小学校の時はなかなか表面化しないけれど思春期になると出てくるところがある。だから急に増えるようですが小学校から丁寧に見ていく、あるいは小中連携しながら見ていったり、福祉も含めてみていくという体制を作っていくということが大事なかなと思います。そういうことから軌道に乗りつつある小中連携の取組を、学力だけでなく不登校や発達障がいにも、幼稚園からも含めて連携して行って、それがもっと広がればコミュニティスクールのような形で高校までも含めてやっていけば、幼少期から青年期にかけて教育の系統的な流れが出てくるのかもしれない。その中に学校のあり方を含めて、将来の理想的な学校を議論していく中で様々な問題も解決していくのかなと思ったところです。

○高橋まり子委員

さっきの意見とは逆の意見なのですが、うちにも発達障がいの子がいましたので、その保護者としては先ほど適正な規模の学校に関して言えば、中学校になると集団が大きくなるのでどうしても特別な対応をしていただきにくくなり、実際、これだけの大人数がいれば大多数の人たちがうまくやっていると合わせる合わないで困る、一人二人の特別なやり方に学校側が合わせるできない、と言われた経験もあり、先ほどとは逆なのですが、集団の中でそういう子たちを学ばせ、集団の方からもこういったこ

とへの認知というのも大切かとは思いますが、必ずしもその中でうまくいく子たちばかりではなく、多鶴子委員がおっしゃったように個別支援の方がうまく作用する子ども達も実際はいると思いますので、中学校区としての2つの大きな枠組み以外にも、もしかしたら学区関係なしに通えるような、フリースクールのようなものではないのですが、公立的なもので支援できるような個別支援に特化した小中学校があるといいのではないかともしました。小学校では非常に目をかけてくれているなどというのはあるのですが、現段階では中学校では実際目が届きにくい、先生方もやることがたくさんありすぎて、なかなか目が届きにくいこともあって、中学校の一般的な段階で言えば、多様性を学ばせるためにも大きな学校は理想的だとは思いますが、大きな学校にそぐわない子ども達も実際はいるのかなと思います。

○鈴木多鶴子委員

私も高橋委員に賛成なのですが、主任児童委員として県立楯岡特別支援学校寒河江校と大江校に行ったのですが、寒河江校が小学部なのですが本当にきめ細やかな対応をしてくださっていました。ただ、まだ認知度が低くて、人数は多くはなかったのですが、こんないい教育をしてるのであれば、発達障がいの子は来れないのですかと聞いたら、発達障がいの子は担当が違うんですと言われて、そういう発達障がいを持った子たちもきめ細かな指導をしてもらったら能力がもっと伸びる子もいるのではないかなと思ってきたところなのですが、そのあたりもうまく連携しながらできる教育もないのかなと思ったところです。大江校の方は中学部、高等部で、生徒が増えていて校舎が足りないような状況のようでした。高等部の方は地域の学校に通いたいということもあるようで増えているようです。

○軽部 賢教育長

小学部の生徒数が少ないのは、小学校の段階においてはなるべく特別支援学校ではなく地元の通常の小学校に通わせたいという親御さんの考えがあるからではないでしょうか。特別支援学校は障がい種による入学になっていて、楯岡特別支援学校は知的障がいというくくりになっているので発達障がいだから入学させたいということにはならないようです。障がい重複している子どもであれば教育相談の中で適正指導しています。

○鈴木多鶴子委員

発達障がいと言われている子ども達に通える特化した学校というのはないのですよね。プロフェッショナルの方が担当してくれるとは限らなくなって、ますます症状が悪くなったりとか、学校で暴れて先生方も手に負えないことになっていたりもするので何か対策が打てなのかなと思います。

○軽部 賢教育長

発達障がいの子どもの進路というのはなかなか難しいです。

○鈴木多鶴子委員

発達障がいをわかっている方が対応しないとっとひどい状況になります。症状のひどい子も出てきています。

○佐藤洋樹市長

発達障がいの子どもの数は増えているんですかね。そういう専門的な教育ができるようなシステムを作っていかなければいけないのでしょうかね。

○高橋まり子委員

本当は大空小学校のように集団の中でそういう子を育てていければ理想的だとは思いますが、まずはその前にもうちょっと個別支援と理解が必要かなと思います。

○鈴木多鶴子委員

理解も本当に必要だなと思います。そういう子の対応も含めて地域での見目が変わると親ももう少し落ち着いてきたり、子ども達も自分はそういうふうに見られているんだというのを敏感に感じるので、地域の理解ということに対してもうちょっと考えていくべきなのかなと思います。

○軽部 賢教育長

それは大事なことだと思います。周りの子ども、大人も含め、障がいに対して理解していくのが一番大事なのだと思います。対応の仕方によって2次障がいになって、学校に行きづらくなっていくというのもあるので、その子どもさんがスキルを磨いていくというのが大事なことで、周りもそれに合わせるスキルが必要だと思います。

○鈴木多鶴子委員

良い方向に変わるとどんどん良くなりますが、悪い方向になるとどんどん悪くなるというのを見てきているので、例として柴橋地区の場合は民生委員や主任児童委員、あとは人権擁護の方などそれぞれの守秘義務はありますが、みんなで情報共有しながら、学校、家庭だけではなく地域ができるサポートをしていこうというケースもありますが、地域の理解などがないと更に広がっていかないと考えています。

○軽部 賢教育長

大きい学校だから子どもに目が届かないというのではなく、いくら人数が多くても一

人一人丁寧に対応するというのが基本だと思います。

○高橋まり子委員

そうだと思いますが現実的には対応は難しいのかなと思います。

○軽部 賢教育長

そこは指導観の問題で、そこはしっかり変えていかないといけない。いくら人数が多いからと言って、それはできません、一律にしなければいけません、ではなくて、一人一人へ丁寧に対応するのが基本だと思います。そこは特殊教育から特別支援教育になったときから変わってきていると思います。

○鈴木多鶴子委員

発達支援といっても子どもによってどうしたらいいのかということと、持ち合わせているもの等、それぞれ違います。そこまで先生方が全部網羅できるかということと物理的に不可能ではないのかなと思っています。今、スクールソーシャルワーカーの養成大学院が酒田の東北公益文科大学で始まるということで、全国的にスクールソーシャルワーカーの役割がすごく大きくなっています。アメリカなどでは学校に数名のスクールソーシャルワーカーがいるということで、それこそ今の柴橋小PTA会長をしている小川さんはアメリカの学校でスクールソーシャルワーカーをしてきたということで、必要とあればそういった情報、どんなふうアメリカでやっているのかを説明します、とまで言ってくれています。これからは学校だけで抱えるのではなく、スクールソーシャルワーカーの活用というのも考えていかないと、先生方では見えない視点、家庭だけでは見えない視点があり、そういった専門家の方たちが、こういうところに繋いだらこの子は生きるのかな、そういう取組をしたらいいな、というのがあると思いますのでその辺も考えていく必要があると思っています。

○佐藤洋樹市長

学校のあり方については、学校の規模や配置等のような問題と、今お話ししたような教育の中身の多様性、きめ細かく更に充実していくかという、そこはそこで常日頃から議論しておかなければならないところかと思いますが、基本的な教育の充実の分野なので、その部分と、あり方検討委員会というものの中身を総合的に議論できればいいのですが、いづれにせよバランスよく取り組んでいくことが必要かと思っています。あまり適正配置の内容に偏ってもいけないとは思いますが。前回も子どもの数が少なくなっていくところをどうするかという話をしたところですが、どうしたら健全な発展をしていくのかと思うところです。

○軽部 賢教育長

国で言っている適正学級数が基本となると思います。学校生活をする上で、あるいは教員の適正配置などからみて12から18学級というのは根拠がある数字なのだと思います。ただ、寒河江に合った、地域の方や保護者が納得する議論をして、こういう適正規模の姿が子ども達にとってもいいのではないかとこのところに持っていく必要があると思います。

最初から統合ありきという話ではなく、どのような適度な規模と配置になれば子ども達にとってより良い教育になるのだろうか、今は子ども達が減って学校の子どもの数もアンバランスになっているのだけれど、はたしてそれでいいのか、とかそういう問題提起から始まって、自分たちの学校はどういうのがよいのかということから始めていかないといけないと思います。地域との話し合いや幅広くアンケートなどもしながら。一方、先ほど話のあった課題も当然大事なことでと思っています。

○佐藤洋樹市長

子どもが減るということもあって、行政主導で住宅団地を造って、子どもの数の減り方を少なくしてもらいたいという要望があるのですが、それもある程度効果があるとは思いますが、市全体としては歯止めになっていくかというとなかなか厳しいものがあります。地域のみなさんの切なる要望でもあるし、地域が活性化していくことが一つの方向性としては大事なので、人が少しずつ少なくなっても地域が元気になっていけば、それはそれでいいのではないかと思いますから、そういう取組などをしないとただ減る減ると言っているばかりで、無策なことになってしまいます。今年も何とか、まだ結果が出ていないですが、社会動態がプラスになるかもしれないです。ただ、中部学区に住宅団地が建つことになるのでトータルではプラスになるのですが、学校の統廃合を考えるのも結果的にはそうなるのかもしれませんが、こういった行政的な手立てをしていくのも子育ての一環と、住民の方々も思っているのだと思います。

○軽部 賢教育長

醍醐小の4年生以上の子ども達の作文が新聞に出ていました。あれを見ていると子ども達も醍醐小が特認校にもなっているし、学校に対する自分の思いもあるでしょうが、もっと児童数が増えてたくさんの友達の中で勉強したいという思いがあるのだろうなと思います。

○佐藤洋樹市長

同級生が少ないというのは非常に寂しいことだと思います。

中学校の統合が先になるのですか。小学校が先になるのですか。

○軽部 賢教育長

この前の懇談会では小学校よりも中学校の方が話題になっていました。

○佐藤洋樹市長

以前、今の中学校を作るとき、各校とも大体同じ規模にしたのではないのでしょうかね。学区を変えるというのはなかなか難しいことかと思います。

○軽部 賢教育長

学区を変えることは統合以上に難しい。今ある学区を基本にしてくっつけたりするのが基本で学区を分けて線を引きなおすのは本当に難しいことだと思います。

○高橋まり子委員

部活も学校ごとではなく、選べるといいなと思います。

○軽部 賢教育長

チームとして人数が足りない場合、2つの学校が一緒にできることになっています。また、自分の進む学校にしたい部活がない場合、例えば寒河江小の子が陵東中でなくて、陵南中のサッカー部に入っているのも何人かいます。教育委員会規則で自分が進学する学校に希望する部活がない場合は希望する部活のある学校に区域外就学できることになっています。ただ、自分が進む学校に希望する部活があるのに部活が強い学校へ行きたいというのはできないことになっています。

○鈴木多鶴子委員

以前は県の指定か何かで陵東中のバスケに学区外から来ている子がいました。金井中などはそれが良かったという時代もあったみたいです。

○高橋まり子委員

寒河江市全体での部活の数を集約することができると、結果的に先生の負担も減るのでしょうか。

○鈴木多鶴子委員

部活のあり方も国レベルで変わってきているのですよね。

○軽部 賢教育長

休養日とかそういったものは子ども達や先生方の負担を考えてしっかり設けなさいというガイドラインが国でも県でも作っています。

○高橋まり子委員

神奈川県では部活を学校では加入せず民間でというところも出てきているようです。

○軽部 賢教育長

部活ではなく、クラブに入る子もいます。陵南中サッカー部ではなく、モンテジュニアユースに行ったり、多様化してきている。

○高橋まり子委員

そうすると中体連のあり方とかそういったことにも関係してくるので簡単な話ではないと思うのですが、あくまでも今は学校対抗です。

○軽部 賢教育長

学校対抗がある限り、小さい学校は厳しくなってくる。

○高橋まり子委員

せめて市対抗だともうちょっとミックスできるのではないかなと思いました。

○國井晴彦委員

市対抗だとユニホームを着れる子が減ってしまうのではないですか。

○佐藤洋樹市長

いろいろな意見いただきましたが、大体よろしいでしょうか。

○軽部 賢教育長

先ほど提案させていただいたような形でいろいろお話させていただきたいと思います。

○佐藤洋樹市長

多様な意見があるでしょうから、そういった意見をまとめて議論を深めていただきたいと思います。長期的な展望で検討しなくてはいけないし、短期的な対応も必要になることもあり、そのあたりをうまく迅速に取り組んでいくと、きめ細やかな学校教育の在り方に繋がっていくと思います。よろしくお願ひしたいと思います。

4 その他

5 閉会 終了 午後4時34分